



TITLE:

<Book Review>Benda, Harry J. and McVey, Ruth T.(ed. and with an introduction by), The Communist Uprisings of 1926-1927 in Indonesia; Key Document (Translation Series, Modern Indonesia Project), Southeast Asia Program, Cornell University, Ithaca, 1960,pp.xxxi+177

AUTHOR(S):

口羽, 益生

CITATION:

口羽, 益生. <Book Review>Benda, Harry J. and McVey, Ruth T.(ed. and with an introduction by), The Communist Uprisings of 1926-1927 in Indonesia; Key Document (Translation Series, Modern Indonesia Project), Southeast Asia Program, Cornell University, ...

ISSUE DATE:

1963

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/54808>

RIGHT:

住民の起源から20世紀前後までのベトナム、ラオス、カンボジア、タイ、ビルマの歴史をまとめている。

本書は5部からなっている。第1部は、地理的環境と先史時代に於ける文化・民族移動・言語の親縁関係・社会状態などが概括的にとりあげられている。第2部は、インドシナ国家の形成と題して、紅河以南への中国の侵入、数世紀遅れてインド文化の流入によって、扶南、林邑（占城・環王）、暹羅、墮和羅国などの国々が拡張していく6世紀位迄の時期。第3部（6世紀から13世紀迄のインドシナ諸国）では、インドシナの三大文明——ベトナム文化、クメール文化、ビルマ文化の繁栄を描く。13世紀は、インド文化の衰退期で、東南アジア全体に《transvaluation de toutes les valeurs》が起り、インド文化はそれまで保護者であった支配者階級から分離して民衆の中に浸透していき、ヒンズー教や大乘仏教が支配者の宗教となっていくと著者は説明している。この衰退期に元の遠征があって、ますます衰退が進められ、元の征服は、単にクメール帝国、チャム王国、ビルマ王国の風化を手伝ったにすぎず、次には新しい王朝の時代が始まる。この13世紀の政治・文化の状況に第4部があてられている。第5部は13世紀以後の各国史であるが、西欧人接触以後は極めて簡単に述べられているのみで、量的にもこの部は全体の1/3を占めるにすぎない。

結論として、シナ化（ベトナム）とインド化（その他のインドシナ諸国）との基本的相違は、中国は征服により、インドは文化的浸透によって、各々の文化をインドシナに導入した点にあって、両者は量の差異でなく質の差であるという。

大変わかり易く書かれており、最近の文献もかなりあがっているので、インドシナ半島における文化の流れを知る上に手頃な書物といえる。（前田成文）

Benda, Harry J. and McVey, Ruth T. (ed. and with an introduction by): The Communist Uprisings of 1926-1927 in Indonesia; Key Document (Translation Series, Modern Indonesia Project). Southeast Asia Program, Cornell University, Ithaca. 1960. pp. xxxi + 177

20世紀初期から独立までのインドネシア民族主義運動史は、1926-7年を境に、二つの時期に分けて考えられる。第一期を民族主義運動の胎動期とするならば、第二期は、純正民族主義を主流とする統一行動確立の時期と特徴づけられる。この意味において、1926-7年は、インドネシア民族運動史上、重要な一時点を構成する。

今世紀初頭における新興インドネシア知識階級の啓蒙運動には、顕著なものがあったが、それは、ともすれば、大衆より分離した運動であった。知識階級の自覚は、大衆にまで伝達されねばならなかった。この役割をイスラムの政治運動が演じている。経済界における華僑勢力や西欧人の抬頭に反対するイスラム中産層は、イスラム同盟 (Sarékat Islam) を結成し(1910)、自民族による経済と教育の高揚運動を展開する。幅の広い運動目標に、大衆との絆を象徴するイスラムが結合することは、この運動組織を急速に膨張させ、1919年には、SIの会員数は250万人にまで達している。

しかし、ロシア革命の影響もあり、イスラム政治運動は左傾化する。この傾向に関して、SI左派は、イスラムの指導層と対立、1920年にインドネシア共産同盟を結成する。独立した左派は、当時、未だ大衆組織化の用具として重要な意味を持つイスラムと分離することによって、弱体化し、1926-7年の革命にも失敗して、全面的に後退する。他方、イスラムの政治運動も又、保守革新の主導権争いのために衰退する。このような情勢下において、スカルノを中心とする知識人により、完全独立を標榜する国民同盟が組織されたのは、1927年であった。

本書は、1926-7年における共産革命の社会・政治上の背景を分析した蘭印政府の報告書の英訳である。この報告書は、オランダ政府が公表を好まなかった秘密文書も含まれている。インドネシア共和国政府の許可を得て、コーネル大学の「現代インドネシア・プロジェクト」によって公開されたものである。報告書の内容は、蘭印総督の報告、バンタム報告、スマトラ西岸部報告の三つより構成され、それに本書には、インドネシア政治史家、H. Benda と R.T. McVey の長文の序論が附加されている。この報告書は、単に近代インドネシア政治史の理解のためのみならず、当時の地方のイスラムの情勢や社会構造の理解にとって、極めて重要な資料を提供すると共に、共産革命における

当時のイスラム教徒の役割, 共産党組織の内実, 西ジャワやスマトラ西岸部の当時の社会・政治情勢など, 幾つかの重要な問題への解答も含んでいる貴重な文書である。(口羽益生)

Goethals, Peter R.: Aspects of Local Government in a Sumbawan Village (Eastern Indonesia). (Monograph Series, Modern Indonesia Project). Southeast Asia Program, Cornell University, Ithaca. 1961. pp. vii + 143

コーネル大学の Modern Indonesia Project 並びに Southeast Asia Program の director であり, 又近代インドネシア政治史研究の指導的地位にある G. McT. Kahin 教授は, かつて, 現代インドネシア研究において, 最も未開拓な分野の一つは, 地方の社会, 政治経済情勢の研究であると述べたことがある。本書は, コーネル大学 Modern Indonesia Project の monograph series の内で, 地方の社会政治情勢を取扱った最初の報告である。

社会人類学者である著者 Goethals は, 1954年より二年間, Sumbawa 島北端の農村 Rarak を中心に, 集約的な現地調査を行ったが, 本書は, その調査報告の一部であり, 題名が示すように, 分析の焦点は, 社会政治情勢に置かれている。

インドネシアの歴史を振り返って見れば, 容易に理解されることであるが, イスラムの浸透した地域では, オランダ植民地政府の分割統治や間接統治の政策とも絡んで, 伝統的な adat (慣習) 首長とイスラムの指導者 kijaji (ulama) の勢力間の力関係が絶えず問題にされている。17世紀にイスラムが到来した Sumbawa でも同様である。Goethals は, Rarak の adat 勢力と hukum (イスラム法) 勢力間の力関係の社会的基盤の分析を試みている。

村落レベルの adat 勢力は, 旧制村長 (kepala kampung) によって代表されるが, この村長の役割が地方自治体の公式的なものに限られ, 漠然としたものであるため, 彼の村民に対する直接的影響力は弱い。1951年の村落合併による村連合 (gabungan) の確立は, 村長の地位を更に不安定なものにしている。kepala kampung の役職名も wakil kepala gabu-

ngan (助役) に変っている。

hukum 勢力の代表者は, 村の mosque の責任者である lebé であるが, lebé は, ジャワの penghulu に当る。lebé を長とする mosque 役員 (isi mesigét) には, その他に, rura, pengulu, mudom, ketib, marbat 等が居る。彼らは, 婚姻, 相続, 死亡に関する手続きの指導監督, mosque での礼拝, その他の儀礼を通じて, 村民と密接な連がりを持っている。注目されることは, 彼らは又, 呪医の (sanro) 役割をも演じていることである。1955年の総選挙では, 政治的に, インドネシアは, 主に四つの政党 (国民党, Masjumi 党, NU 党, 共産党) に色分けされたのであるが, Rarak においては, hukum 勢力が Masjumi 党を支持して圧倒的に強い。adat 勢力は, イスラム保守の NU 党を, 一部青年層は, 国民党を支持している。Masjumi 党は, 本来, 知的, 進歩的なイスラム革新派の政党と特色づけられているが, Goethals は, それが, Rarak においては, 文盲率の最も高いイスラム保守派によって支持され, インドネシア地方政治の社会的基盤は必ずしも全国レベルと合致しない点を明確に指摘している。(口羽益生)

Geertz, Hildred: The Javanese Family, A Study of Kinship and Socialization. The Free Press of Glencoe, N.Y. 1961. pp. xii + 172

本書は, MIT 国際研究センターにおける Java project (1951-53) の成果の一部である。同プロジェクトでは, 七人の社会学者並びに人類学者が, 夫々, 村落, 市場, 政治・階級構造, 家族, 華僑社会, 言語のテーマを担当し, 東ジャワ, スラバヤの南方, ブラントス河流域の人口約1万8千人の Modjokuto という仮名の町を中心に二年間の現地調査を行っている。この調査成果は, 既に, 調査員の学位論文として報告済みであるが, 書物として最初に出版されたのは, 前号の図書紹介欄にて紹介した C. Geertz の「ジャワの宗教」であり, Geertz 夫人の本書が, 二番目のものである。同夫人は, ハーバード大学, カ州大学, MIT などで, 研究員又は instructor として活躍しておられたが, 目下, 主婦として「家庭づくり」に専念しておられるようだ。

副題が示すように, 本書では, ジャワ人が, mature